

「うむ。」とばかり、健吉は、己一人を杖とも柱とも頼みにして居る。他愛無き母妻の其様を見ると、夢にも知らぬ明日からの貧苦が懐ばれて、思はず涙含まるのであつた。

其後、間もなく一時盛大を極めた藤村洋品店は、白晝ながら堅く大戸を鎖して、斜に貼られた「賣家」の札に、秋の風寒く、そぞろに往来の人の語草とはなつた。

森の黄昏

△第 三 等 ▽

美 知 代

夏ならば涼しい青葉蔭に時鳥來鳴く下賀茂の社頭も、秋を迎へてすつかり趣を變へた。殊に京都の氣

候と云つたら、昨日漸く冷風が立初めたかと思ふ間に、今朝は最早綿入れ羽織が欲しくなると云つた有

此處五年を出でずして、必ず以前に立勝る富を得て見せると、打てば響く確乎たる自信は、絶えず胸臆から胸臆へと反響して……。其が又彼に取つては唯一の慰藉なので。

【完】

健吉は限りなき悲嘆に沈む老母を勞り、泣感ふ妻を慰めながら、本所の去る片邊へ引移つて、昨日に變るやつれ姿で、安小間物の行商を始めたが、今も猶昔に變らぬのは、商人になくては叶はぬ功名心ひとつ！

様で。

二三日續けて降つた霜の爲に木の葉のあらかたは散失せて、僅に一樹の命を残すら程も無う、根に復る哀れさを見せて、馬場一面の芝原は處々に灰を撒いたかのやう。

本殿へ通ふ並木道との間を流れれた清水が、微かな力無い聲で物寂し氣な歌を歌ひ乍から却て一種の幽寂を増す計り。



ら落葉の上下をぬけて行く其の並木道にも秋は宿つて、つい此頃迄繁つて居た松公孫樹名も知らぬ雜種の大木は骨露はに幹を延べて、血の氣の失せたやうな小枝には翼寒むさうに小鳥が鳴いて居る。日の光も何とは無う疊合とほの白く、遙に朱い鳥居が見えるのすら、此様な景色の對照

ると自ら神寂びた念が湧いて、やがて涙も溢れるのである。がそれは恐らく自分一人ではあるまい。自分は此頃日課のやうに夕餉を済ますが早いか、愛誦の藤村詩集を懐に毎日々々此邊を散歩くので、否之は此頃初たのでは無い、自分が二年前都合あつて京都へ轉住つて以來、少々の雨風には頗着無く旅行と病氣と止むを得ない時を除けては、必ず此自然に接して苦しい煩悶も訴へれば儂い運命を泣きもして、且又渺なからぬ慰藉と力をを受けたので、實際下賀茂の森は自分に取つて唯一の隠れ家であり、はた又生命の安息所とでも云はうか。父は死んだ、母も亡なつた、兄もなければ妹も無い、ほんに人として淋しい身ではあるが只此自然の懷計りは自分の爲に温い。——何時ものやうにこんな事を考へ乍ら歩くともなく歩いて、何時しか自分は長い並木道通り抜け、朱い鳥居をくつて、宮殿へは寄らず音に名高い糺の森へと這入つて、上面の黄勝つた落葉をふ

んで、恍惚音を聞き、音が止めばまた歩み、參差亭心地よく聳り立つた公孫樹の木蔭を逍遙うた。歩み勞れ音にも飽いたので、遂に落葉をかき集め、静に其上に坐つた。勿論種々の空想を自由な憧憬の翼に載せて、而して其空想の翼が遂には双羽をひろげて此森一ぱいと成り、更に大きくなつて、果ては世界の上を駆け廻つて居るかのやう、我を忘れて幾時かを興に入つて居た。やがて軽う肩を叩くものゝ氣に心附くと、更に黄金葉一つ落ち散つて、憚つたやうな歎歎の聲が直ぐ背後から聞えたので、宛ら撥出されでもしたやうに、自分は一切の現實に復つたのである。只見ると彼方に悄然と坐つて居るものがある。後姿計りで顔は分らぬが、二十四五でもあらうか、瘦形のすらりとした體に栗梅勝つた縞お召の道行を着て、白茶色の肩掛け、髪は品の好いエス卷六許りの女の子に寄添うて俯いた襟足の美しさ。『泣くの嫌よう』長いまづげに露を宿して、少女は

『凝然と見上げた儘傍眼もふらぬ。見れば今にも泣き出しさうな様子で、可愛い口元がびりと痙攣れる……。

『よう母ちゃん』

『あら、泣きやしませんよ』と周章て云つて、強ひて涙を飲み込み、暫くして、『でも美佐ちゃんと逢つて餘り嬉しかつたもんだから』

『左様よ、妾だつて泣いぢやつてよ』

『オヤ、母ちゃんお嫌なの』

『好きよ大好きよ、だつても母ちゃんだつて泣いてるちやないの』

『オホ、妾も美佐ちゃんが一等可愛い』

『うそよ、うそだわ』

『何故?』

『だつても皆が、母ちゃんはお前を可愛くないのだからうつて云ふわ』

『あら、泣きやしませんよ』と周章て云つて、強ひて涙を飲み込み、暫くして、『でも美佐ちゃんと逢つて餘り嬉しかつたもんだから』

『だけども、妾何うしても母ちゃんを嫌ひになれないのよ』と可懐し氣に傍にすり寄つて『ねえ母ちゃん、後生だから妾と一所にお家へ行きませうよう』『否、今日は駄目なの……而してお祖母さんはお達者ですか』

『あらあんな事云つて、屹度又何處かへ去つちやうのよ』

『母ちゃんだつて、それはお前を手放し度かないけれども、左様云ふ譯に行かないの。お前はまだ年が行かないから何もお知りでないが今に成人くなつたら全然お解りです、小供心に不人情な母だと恨んでもおゐでだらう。けども、けども……否もう／＼母ちゃんの事なんか忘れて、一生懸命お祖母さんを大切に、父様の申付けを何でもハイ／＼ツて聞くんです』

「嫌よ／父様嫌よ」
『何でせうねえ美佐ちゃんは』

と酷しく云つたが、衝と引寄せて抱き締た儘、さ
もさも可愛くて堪らぬと云つた様子に、幾度となく
頬摺りしては済然と涙を流すので、美佐子もつい悲
しくなつて泣き出した。

『お前は眞實に可哀想だよ、兩親立派に揃つて有り
乍ら……堪忍して頂戴。でもお祖母さんがよく面倒
を見て被下ツて云ふから……さあ餘り遅くなる
といけません、歸りませう』

『ちや母ちゃんは如何してもお家へ行かないの』

『あゝ左様ですよ。けどもお祖母ちゃんにも誰にも
母ちゃんに逢つたと云はなきや、もう一度ツきり
此處で明日逢へるかも知れない』

『何故云つちや悪いの、お祖母さんも屹度逢ひ度が
るわ』

『何と云ふ無邪氣だらう、あゝ一寸お前此方へお寄
りな』

りな、此御袖は何でせう、全然とれてるぢやないか
ね』と云ひ乍ら、荒い矢飛白の被風の綻びを結ん
で、矢張何と云つても行届かないのねえ』
『あら、あら家の初やだよ、初やあ、お前何處へ行
くの』

ばたぐと人の驅け寄る足音に、母はあなやと驚
いて、つと闇の中に身をさけた。

『お嬢様、あなたはまあ何故お一人でこんな處に被
居いました。早くお歸りなさいませんとお祖母様は
大變に御立腹で御座いますよ』

『だつても妾……』

『そんな事を仰有ると初やはお祖母様に云ツ告げて
御飯を差上げませんから、さあ早くお歸り遊ばせ』

『嫌だ／＼』

けれ共下女は無理に引立て歸るので、自分は何か
の力に壓せられた心地に、胸が引締つて化石のやう
に固くなつた。

中の濕つた空氣を破つて、觸れば霜になりさうな光
影は此年古い森の中の湿つた空氣を破つて、觸れば霜になりさうな光

しい聲が、つい傍の梢から起つた。
自分は其儘歸つたが、哀に感じた母子の係は却よ



其頬には玉なす涙がしどりに流れて居る。
風が吹いて木の葉が舞ふと、名も知らぬ鳥の消魂

『美佐ちゃん堪忍してお呉れよ』
激しい歎歎の間から押出す聲の途切れく、繰返

忘れられないで、今でも何かすると何故の離別だらう等と、他事ならず胸を痛めるのである……。【完】

△第三等▽

ふりわけ髪

喫 喫 軒 主 人

上

「十年以前とは全然町並が變つたね。」

と、暗の裡からいとゞしく打濕つた聲音。

『はゝはゝ然し何有も町並が變るぐらゐに不思議は無いさ。あれほど堅い約束を爲て別れた兩人の間で

すら……ねえ、お留さん、然うぢや無いか。』

隕に霞む神田明神の境内、暗澹い樹立の片陰に放れたベンチに身を凭せて、數かぎりも無い電燈の光

り、美くしい都大路を俯瞰して、返辭の無い對手を恨

みがましく更に促したのは正しく男である。
『余さん、貴方にさう謂はれちや、妾はもう……。』
と、袖に涙を拂つたらしく、
『妾アもうね、何てツて宜いか解らなく成るの……。』
小兒の時から末は屹度夫婦だと思つちや、顔を舐め合つた間ですもの、這麼ことに成らうたア、妾だつて夢さら知らなかつたわ。』

『私にや猶さら夢としきや思はれないのさ。桃割に結つた可愛らしい留ちやんを残して、亞米利加へ行つた頃は、什麼辛苦を爲ても宜いから思ふとほりに

『アラ！ お怒りなすツたの、彼様もの、妾ア些少も可愛いと思はないから宜い。』

『はゝはゝ怒つても仕方が無いさ、亭主のある女が小兒を産むのに不思議は無いからね——然し、つくづく考へて見ると、人間は運だね、悉皆誰だつて眼には見えない運の神様の絲に操られてるんだ。噫、己ア此から什麼なるんだか？』

的も無い空を仰いで歎つ氣勢。

『妾だつて奈何して宜いんだか……。』

堀らず女は尋と寄添つた。

金を溜め込むで、一日も早く歸つて好な留ちやんと嬉しい世帶を持ちたい、持ちたいとそればかり考へて居たのだ。月日の経つのは彼地だつて依然變らねえ、十年は眞實に夢の間だ。それでも辛と豫期に近い金を握つて一散に歸つて見れば、肝腎の留ちやんは立派な他の細君に成つて居て、小兒まで出來てる始末なんだ。己ア落膽しちまつた、もう溜めた金は愚か、生命までも要らねえんだ。』

『余さん、妾だつてそれアもう肚裡は貴方とおんなじよ。些少も變りはなかつたんだけども、兩親とも年齢は老つて來るし、貴方からは書簡のお返辭が幾度出してても梨の疊なんでせう、心細かつたのよ。妾ア兩親に心配させるのが辛いんだもの、到頭今の人と厭々一緒に成つちまつたわ……耻かしいわ、厄介な者まで出來てさ……。』

『結構ぢや無いか、子寶だ。はゝはゝ此程結構なものは無い』と嗤聲には底鏽を帶びて居る。

『ウツブ、オイ奈何しやがツたんでい。亭主がな、終日汗みづくに成つて働いて歸りや、框にや手拭と石鹼、サア一風呂浴びて来てくださいツて謂はねえばかりに爲といてよ、その留守にや魚屋へ一走り、好な酒でもたツぶり買つといて、整然と燭でも附け